

コカヌエネ

紋別の遺骨
4体の地元帰還決定!

2016年11月25日、アイヌ遺骨返還請求訴訟(紋別事件)の和解が札幌地裁で成立しました。直後に札幌弁護士会館で開かれた原告団記者会見の模様をお伝えします。



和解成立後、記者会見する原告の畠山敏さん(右から2人目)、市川守弘弁護士(左端)ら。2016年11月25日午前、札幌弁護士会館で。撮影・市川利美。

市川守弘・原告代理人 きょう、紋別で畠山敏さんが訴えを起こしていた、紋別から発掘されて北大が保管している4体の遺骨について裁判の和解が成立しました。来年(2017年)7月6日以降、利害関係人として参加した紋別アイヌ協会という団体に対して、遺骨を返還する。返還場所は、現在、紋別アイヌ協会が管理している、かつて国道(建設)とかいろいろな関係で(地元で)出土しているアイヌ遺骨300体以上がとりあえず安置されている納骨堂があるんですが、そこに引き渡す、という内容です。そこまでの搬送費用はすべて北大が負担する。北大の負担で遺骨を返してもらおう。ただし、その後の再埋葬については紋別アイヌ協会の責任および費用——費用とこのいろいろの考え方がありますが——どこに再埋葬するかも含めて委ねる。北大はそれに対して口を出さない、という和解になっています。基本的な骨子はそれだけで、(原告側が求めていた)慰謝料請求は放棄する、というふうに和解はまとま

りました。再埋葬費用について、なんで浦河町柵臼の場合(北大側が墓地への再埋葬費用を負担)と違うのかと言いますと、紋別の遺骨4体はいずれも北大自身が発掘したものでなくて、第三者から北大が「寄託をされた」、つまり提供を受けた遺骨ということなので、(墓地から直接)発掘したのが北大ではないので、再埋葬(費用)までは北大に要求しなかった、ということです。

記者 きょうの和解を受けて、今のお気持ちを話していただけますか。

原告・畠山敏さん ほかの地区と(遺骨の持ち出され方が)違う、ちゅうのかな。「北大は寄託を受けた」ということで。ただ、私の気持ちとしては、こういう裁判を起こさなかったら、寄託を受けたものですら、北大は遺骨をアイヌに返してくれないのかなあと。私が今管理している遺骨つちゅうのは、平成元年と9年に2回合わせて320霊体、紋別の墓園に2坪くらいの建物を造つてもらって、そこに安置してあります。(今回返還を受ける)4体を、来年7月6日以降、帰ってきたら、そこに安置をしたいと思っています。

記者 「裁判を起こさなかったら返つてこない、寄託を受けたものですら返してくれないことに憤りを感じる」とのことでしたけれども、和解でいったん区切りが付いたことについてはいかがでしょうか。

畠山さん それは非常に、私どもにとっては、やはり七十数年、72〜73年にわたって北大に安置されて、それがやはりふるさとに遺骨が帰ってくる。まあ……仏さんちゅうのか、遺骨も喜んでいと思います。

※北大開示文書研究会のウェブサイトで記者会見の全文と、和解条項をご覧いただけます。

アイヌ遺骨
返還請求訴訟
ニュースレター

No.16

2017年3月18日
北大開示文書研究会



特集 アイヌの遺骨はコタンの土へ 歴史的な再埋葬を語る集いから

北大開示文書研究会とコタンの会は2016年11月25日夕、札幌の北海道クリスチャンセンターで市民集会を開き、訴訟原告の小川隆吉さんをはじめ、杵臼での再埋葬^{きねうす}参列者が次々にスピーチしました。集会には約130名が参加し、全員で「杵臼からのメッセージ」を採択しました(p8)。なお集会の全記録は文書研ウェブサイト^{http://www.bunsho-ken.com}で公開中です。(写真)右から小川隆吉、山崎良雄、小川トシ子、高月勉各氏。撮影・平田剛士。

小川隆吉(訴訟原告、コタンの会顧問)

いろいろ考えてきたんだけど、もう、胸がいつぱいになって。困った。私はね、自分の親族(の遺骨)が北大にあるのを知らないまま(提訴後の)2年間を過ごしてきた。それが分かったのは(北大のアイヌ)納骨堂に入って(杵臼から持ち出されてきた遺骨を)見た時に「小川海一郎(叔父の名前)」と(頭蓋骨の)頭に書いてあった。これで完璧に……。 (杵臼の)私の墓に墓碑があったの。その墓碑(に刻まれた故人の名前)の中に「小川海一郎」と書いてあるんで(海一郎の遺骨は掘り出されず)てつきり墓の中にあると思ってきたの。それがね、ついに北大にあるのを確認した。うん。この状況を(実現させるきつかけになったのは)、(08年1月に)北大の恵迪寮^{けいてきりょう}にいる医学部の学生から私に電話があつて、こう言った。「小川さんが探しているアイヌ人骨台帳らしいものがあったよ」と。「まさか、ホントかい?」と言ったら、「僕は嘘を言いません」と言った。このことがなかったら、今日はないんだわ。いま、この青年に会いたいと思って

いるの。風の便りでこのこと(杵臼への遺骨返還実現)を見ていたら、会いに来て欲しいと思います。終わります。(拍手)

山崎良雄(原告・城野口ユリさんの実弟、コタンの会副代表)

城野口ユリの弟です。母親は「オラ、いつ死んだってあれだけど、死んでも、先祖様は迎えにきてくれないだろう、喜んでくれないだろう」、そう言つて亡くなった母親です。それを受け継いだ城野口ユリ姉は、がんばつて、みなさんのご支援を……。遺骨が帰ってくる姿を見ることなく、昨年(2015年)の3月27日に亡くなりました。今年の7月17日、再埋葬の日に、母親の遺影は城野口ユリの娘、母親にすれば孫ですね。孫が抱いて。城野口ユリの遺影の写真は、浦河アイヌ文化保存会の仲間であつた吉田みねさんが抱えて、再埋葬やつていただきました。このたびのみなさまのご支援、カンパもいただいで、その中でできたことと思います。本当にありがとうございました。これからいろいろあ

ると思いますが、みなさんのご支援をひとつ、よろしくお願い申し上げます。(拍手)

小川トシ子(小川隆吉さんの実姉、コタンの会)

私は、隆吉の姉でございます。今年7月15日、真駒内の泉町の藤野さんが北大まで送って下さいまして、そして納骨堂の遺骨をいただきまして。それから三浦牧師さんのクルマで杵臼まで行きました。私は昭和43年9月にこの札幌に来ました。それまで杵臼のお墓に毎年お参りに行っていたと思います。あちこちね、窪んだような状態になっているのを見て、不思議だなあと思いつながらいました。いま考えてみたら、そういうことで、先祖のお骨を持ち去られていたんですね。カムイノミ、イチャルパをしまして、再埋葬しました時に、城野口ユリさん、もし(生きて)

コカヌエネ

こえを、きこらう。

いたらと胸いっぱいになりました。ほんとにね、ユリさん……。お力添えもありまして、そして再埋葬できたことを感謝しています。(拍手)

高月勉(コタンの会事務局長)

おばんでございます。新ひだか町静内から参りました、高月と申します。私は、コタンの会初代事務局長をさせていただいています。今回、再埋葬につきまして、私は初めての大きな経験をさせていただいたんですよね。静内町に主な会員メンバーがいるんですが、静内町で今回の料理、たとえばコンブシトとか、ラタシケツプ、それとトノト、お酒です。準備することになりました。私が担当なものですから、走り回って……。裏方の人たちの苦勞を私たち、(ふだんは)あまり顧みなかったんですよね。実際、料理を作る時には必ずそういう裏方が大事なんだということ、身をもって感じました。そういった点では、またすぐく

良い収獲だったかなと思っております。だけど、料理を作ってくれている女性の方なんですけど、その話を持ち込んだ時に、「私自身も何かザワザワするものを感じる」と。それが何だったかって言うと、コタン、つまり杵臼に遺骨が帰ってくる、その行事に自分が参加できる。自分の作った料理を、遺骨の前の祭壇に飾ることができたことに対するものを感じた、という女性の方がいました。実際、杵臼の会館に遺骨が帰ってきた段階で、そのごちそうを並べて、イチャルパを行なって、遺骨の前に座っている時に、「遺骨から『ありがとう』という声を感じた」と言うんですね。「まさにそれが私の使命だったんだ」というふうにその方は語っておりました。そのように感じた時に、やはり同胞に対する……コタンの会の清水会長がおっしゃってましたが、やはり同胞の威厳、尊厳、それに対して敬意を表する行事をやりたい、ということ、粛々と進めてきたんですが、まさにこういうことなんだな、と、私自身も感じました。先週(2016年11月13日)、静内町におきまして、遺骨が北大に170体——200体弱かな——の遺骨が持っていかれ

てると。いわゆる盗掘されて、しかし(表面上は)「合法的に」……。、ということもありましたので、それに対する報告会もやりました。なぜそのようなことになったのかと。当然、町行政、静内町なら静内町のね、行政担当者も黙認していたと。北大が持つてくことに対して。ある意味「合法的」に。それに対して、町民

北大開示文書研活動の集大成!

アイヌの遺骨はコタンの土へ

北大に対する遺骨返還請求と先住権

北大開示文書研究会 [編著]

2016年4月20日 緑風出版 [発行]

四六版並製 / 304頁 / 2400円+税

ISBN978-4-8461-1604-0 C0036

全国の書店、ウェブ書店で取り扱っています。



コカヌエネ

は何も逆らうものはいなかった。当然、それに関係するウタリ協会とか、現在は改名してアイヌ協会になって

いるんですが、その方たちについても、おそらく「そのことは口にしない」という流れがあったんですね。

それを今回、このような形で学習会をやるつちゆうことは、「寝た子を起すな」という批判の声もいっぱい聞かされました。だけど私たちが

「コタンの会」を結成した。そういう経過の中で、これからも遺骨を含め、アイヌ人権、そういうものを

回復するための運動の母体となろうというところで、現在進めてきた結果が、再埋葬という今回の大きな事業

だったのかな、と感じております。ここに至るまでに、北大開示文書研

究会、もちろん多くの協力者もいますけど、市川弁護士をはじめ弁護団

の方々の尽力によりましてこれが達成できたというに対して、私たち「コタンの会」も大いに感謝しながら、これからも運動を進めるため

に努力していきたいと考えております。(拍手)

葛野大喜くすの だいき（コタンの会、札幌大学ウレシパクラブ）

みなさん、こんばんは。葛野次

雄の息子をさせていたでいていま

す(笑)葛野大喜です。自分は小さ

いころ、アイヌのことを父と一緒に

やったことはほとんどなかったんで

すよね。今回やったような儀礼・儀

式、カムイノミに父さんに誘われて

3、4回は参加したことはあったん



葛野大喜さん(左)と父・次雄さん。撮影・藤野知明。

ですけど、ホントに気持ちのこもったカムイノミっていうのをしたことにはなかったんです。自分の祖父(葛野辰次郎エカシ)と父がアイヌ文化を守り続けてきて、自分がアイヌ文化を受け継がないことは、とても残念だなあと感じて、今年度より、札幌大学ウレシパクラブでアイヌ文化の勉強を始めています。父さんのように堂々とカムイノミをできるようにになりたいと思って札幌大学に入学したんです。7月のカムイノミは、父さんから誘われたから行ったというだけで、今までこの遺骨が帰ってくるまでの85年間、たくさんの方が悔やんで、本当に取り返したいという気持ちで……一番取り返したいと願っていた城野口ユリさんのことも自分は知らないし、今回、映像を見たのが初めてでした。自分は遺骨問題のことを全く知らないで、本当はあのカムイノミも「していいのかなあ」という気持ちもあつたんですけども。カムイノミが終わった後にたくさんの人からたくさんのお気持ちを聞いて……理解できたのはほんの少しだったんですけども、参加して良かった。ほんとうにアイヌ民族がこれから変わっていくこと、その

だなあ、ということをとでも意識しました。それから4カ月経って、こどももそんなに話すことはないのかなあと思つたんですけども。あれから本当に、自分は、あのカムイノミが終わった後、すごい、何度も何度も後悔しました。自分はまだまだ未熟で、もつとできることがあつたんじゃないのか。父さんに任せただけもあるし、コタンの会のみなさんに任せただけもあるし、自分ができることがもつとあつたんじゃないかと、本当に後悔して、いま……いまこの場に立って、話をして良いのかっていうのも思つたんですけど。一番にここで言いたいのは、本当に遺骨が帰ってきて良かった。そして、自分がこの問題に関われたこと、アイヌ文化を、アイヌとして生きる事ができた。和人として生きてきた今まではなくて、今年度からでも、アイヌとして生きて、アイヌとしてここに立てた。そのことをとてもうれしく思っています。先ほどみなさん、ここで話していたし、父さんも話を聞いて、本当にみなさんには感謝だなあというふうに思いました。(拍手)

清水裕二（コタンの会代表、北大開示文書研究会共同代表）

浦河町杵臼の墓地から持って行かれたお骨については、私どもの先祖のご遺骨、先祖の魂、12体を返還してもらったわけですが、これを受け取るのに、私どもは「コタンの会」という団体を設立いたしました。

どなたも同じ思いになっていただけたと思うんですが、再埋葬などと言うことは本当に未知のことでありますね。私どもコタンの会としては、本当に雁首（がんくび）を突き合わせながら、喧嘩（けんか）がくがくの議論を積み重ねながら、創造的、慎重、前進的というのを基本方針にして、3つのポイントを踏まえて取り組むことにしま

した。

1つ、国や北大に対して、心ある言葉をちょうだいしたいということです。2つ、コタンの会は当事者として、返還される遺骨を心より受け取って、心からのうやうやしい、アイヌプリといましようか、慰霊をするということ。そして3つ、まさに歴史的に初めてのことですので、再埋葬という、私は大事業と表現したいぐらいですが、国内あるいは国外への情報発信をすべきであるということ。

これら3つを私ども、基本方針として取り組みました。ほんとに、毎日のようにと言って良いと思いますけれども、近在のお年寄りを訪ねてご意見やらアドバイスをちょうだいしたり、近くの博物館を訪れまし

て、過去に行なわれたアイヌの葬送の記録を確認し合い、当日に至りませんでした。まさに創造的・慎重・

前進的な気持ちで、激論を重ねながら企画をしたんだよ、ということをまず報告したいなあと思っております。

今日の報告会では、08年1月に小川隆吉さんが開示請求した経緯を含めてですね、ご遺骨の返還を受けた、再埋葬した、ということを経々説明させてもらうわけでありますが、じつはですね、非常にですね。私としては心が煮えくりかえるような思いがあったことを少しお話しします。私ども「コタンの会」がね、「どこからお金をもらってるんじゃないかねか？」という、とんでもないことが流されていた。それをまともに受けながら、耐えながら、ホントに頑張つてやったわけでした。全国のみなさんがたからのほんとに温かい心、大きいご支援、カンパをちょうだいして、実行したということをご報告申し上げて、きょうご参加のみなさま、全国のみなさまに深く深く御礼申し上げます。ありがとうございます。ありがとうございました。（拍手）

返還するって、しごく当たり前のことですよ。この当たり前のことが、道内のみならず、当然だという世論が築かれつつあるということをご承知いただきたいと思っております。さらに、外国にもアイヌ人骨返還の話題が出ているということをご承知かと思っております。このように、ほうぼうにいろいろな広がりが出ているということをお知らせしたいと思っております。このような情勢になっておりますので、私たちの先人のご遺骨の地域への返還の動きを高めるということが、きょうの集会の大きな大きな目標であると思っております。

最後にありますけれど、この再埋葬事業を終了した後、北海道のみならず、全国的な大きな反響が広まったというふうに申し上げたいと思

います。（拍手）

この後、それぞれのみなさんから詳細にご報告申し上げたいと思っておりますので、どうぞ最後まで耳を傾け、聞いていただければありがたいと思



清水裕二さん。撮影・平田剛士。

ラムトウナシ きいて、始める。

杵臼からのメッセージ

アイヌ遺骨返還訴訟の和解にもとづき、去る7月17日、北海道大学に長らく持ち去られていた12体の遺骨が、「コタンの会」の手によって、浦河町杵臼共同墓地に戻されました。地元のみならず、各地からの大勢の参列者がどれほど心安らいたことでしょうか。杵臼コタンのシンリッ・エカシ・フチ（祖先の方々）も、同胞の80数年ぶりの帰郷をさぞ喜んでくださったと思います。「先住民族の権利に関する国際連合宣言」（2007年採択、UNDRIP）に列挙された「集団としての権限」の一端を、原告や「コタンの会」は史上初めて取り返しました。

ところが北海道大学は、ほかの地域からの収集遺骨については、被害コタンからの請求がない限り、すべてを「象徴空間」に送る方針を変えません。他大学・博物館も同様のようです。

かつて大学研究者たちが収集したアイヌの遺骨は、「象徴空間」などに再集約するのではなく、それぞれ元のアイヌコタンの墓地にこそ返還すべきです。

かつて、一方的に発掘し、持ち去った過去の歴史を解明することなく、大学や研究者、政府の責任のありかを検証せず、謝罪もないまま、遺骨を一方的に集約し、再び研究対象とすることは、UNDRIPに反し、「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」（2008年国会決議）を空文化する、著しく人道から逸脱した暴挙と言わねばなりません。

以上をふまえ、私たちは次のメッセージを発信します。

（1）政府は、「象徴空間」への遺骨集約を中止し、収集遺骨を早急に元のコタンに返還する手立てを講じましょう。「杵臼」をモデルに各地アイヌ集団（コタン）への遺骨・副葬品完全返還のプログラムを確立しましょう。近代以後のアイヌ政策を反省し、アイヌに謝罪し、コタン復興を支援しましょう。

（2）アイヌ遺骨を収蔵する大学、研究機関、博物館などは、遺骨収蔵の経緯を検証し、その結果を公表し、自らの責任を認めて、アイヌへの加害を謝罪しましょう。コタンへの遺骨の返還に誠実に取り組みましょう。

（3）墓地発掘・遺骨持ち去りを受けた各地のアイヌ協会は、返還遺骨の受け入れとイチャルパ／シンヌラッパ（祖先の追悼）に向けた活動に取り組みましょう。また各自治体は地元の被害について調査・公表し、遺骨受け入れ活動を支援しましょう。

（4）市民は、アイヌに対する植民地支配・同化政策について学び合い、地元への遺骨返還を支援しましょう。

2016年11月25日

「歴史的な再埋葬を語る集い」参加者一同

アイヌ遺骨返還請求訴訟

ニュースレター第16号

発行日 2017年3月18日

編集発行 北大開示文書研究会

共同代表 清水裕二、殿平善彦

事務局 〒077-0032 北海道

留萌市宮園町3-39-8

三浦忠雄方

TEL/FAX 0164-43-0128

E-MAIL ororon38@hotmail.com

WEBSITE <http://hmjk.world.coocan.jp/>

北大開示文書研究会とコタンの会は、墓地発掘など遺骨持ち去り被害を受けている全道約50カ所のアイヌ協会・自治体、また政府や大学など関係機関にこのメッセージを届けました。